

## 孔子と支那

支那史に於ける孔子の位置は單なる儒家としての存在ではない。支那史の大動脈を貫く支那儒教精神の根源は孔子であり、従て孔子以後の支那史は、孔子の心を本流として之に纏り來つたものと考へられる。

人或は孔子が其の論語の中に、述べて作らずと言つたことから、孔子は單なる先聖の祖述者たるに止り、従て孔子を以て儒家の祖となすは當らず、これを以てすれば、支那史の大幹が儒教精神の反覆離合であるとは言へ、孔子がその功績を獨りすべきものではないと説くものもある。然し乍ら儒教の大精神をして今日の位置にあらしめたのは、孔子一代の事業であり、儒教精神の功罪は別問題として、支那の動きが、常にこの儒教を以て最高道德の標準として進展し來つたことを考ふるならば、孔子は正に儒家の祖であり、其の精神こそ支那史の大流であるとの断定は決して誤謬ではない。

かく考へ來れば、儒教を知らずして支那を語ることは出きない。今日の所謂階級鬭争是認の指導精神の基礎からは、支那を今日の混亂に導いたものは儒教の階級觀念なりとの觀察から、排儒毀廟の主張が、今日國民革命軍一派の熾烈なる叫びであるが、支那をして今日あらしめたる精神、而して支那をして今後進行せしむべき方向の根幹は、矢張り儒教精神である。孔子はこの意味に於て支那の歴史と共に終始すべき存在である。

支那を知らんとするものは孔子に觀よ。

本輯は我社がこの主張の下に、孔子の故地山東曲阜にその現状を展觀して、支那を知るもの及知らんとするものに、支那に於ける孔子の位置を語らんとする一臂の企てである。